

## 宣教師及び日本人教育者と国際問題

—戦時下の日米関係を軸に—

辻 直人 (和光大学)

### 今日の課題

アメリカ人宣教師と日本人キリスト者教育者たちが、国際的な混乱、特に日米関係が悪化する時代背景の中で、どのように翻弄され、その事態にどう対処したのか、様々な人物を取り上げながら、検討してみたい。

日米摩擦解消の動き 1927年「青い目のお人形」12000体以上がアメリカから日本へ

### 1. ラマート事件について

ラマート事件とは、米国長老教会宣教師ウィリス・ラマート (Willis Church Lamott) が1935年12月に明治学院高等学部教授を務めている時、高輪警察署で二日間にわたり朝11時から夜8時まで不敬罪容疑で尋問された事件。

ラマート容疑の核心：明治天皇を「実に偉大な人間」と述べたこと

調査官の一言「一人の人物が人間であり神でもあると信じているとは、キリスト者はなんと馬鹿らしい人たちなのか」(“Some Observations Concerning the Problem of Christianity and the State in Japan with Special Reference to the Problems of Christian Education” (「日本におけるキリスト教と国家をめぐる問題についての観察—キリスト教教育をめぐる問題に着目して—」)

1935年12月19日付ヘラルド・トリビューン紙 (*Herald Tribune*) “U.S. Missionary Faces Trial for Slur at Hirohito: Presbyterian Editor of Tokio Publication Questioned by Police in Lese Majeste, Likely To Be Deported, Lamott Denies Intention to Insult the Emperor” (「アメリカ人宣教師、裕仁への中傷で公判へ：東京で出版物を編集する長老教会宣教師、不敬罪で尋問、国外追放の見込み、ラマートは天皇侮辱の意図を否定」)

帰国後アメリカで出版された著作 *Nippon: The Crime and Punishment of Japan* には、大変激しい論調で、日本政府や指導者たちに対する痛烈な告発が綴られている。その文面から、ラマートの日本の指導者たちや国家への怒りが相当貯まっていたことが伺えるが、その怒りは決して一般大衆に向けられることはなかった。

ラマートの主張：日本の教育について、東洋で最初に教育制度を普及させ識字率が 97%に達していることを評価している一方で、教育内容は「単なる先進的な西洋の技術や技能の修得に留まり、西洋文明の根底を支えている自由、人間らしさ、精神的な要素といった部分を欠いていて、人々の持つ可能性は閉じ込められている」と指摘<sup>1</sup>。教育勅語については、国家的カルトのマグナカルタ (the Magna Charta of the National Cult) と述べ<sup>2</sup>、更に、日本はプロパガンダ首謀者のパラダイス (the propagandist's paradise) <sup>3</sup>とまで強烈に国家への批判を繰り返している。

編集長を務めていたジャパン・クリスチャン・クォーターリーにも、たびたび日本のキリスト教学校に関する記事が掲載されている<sup>4</sup>。事件後のクォーターリーで、唯一ラマートが署名入りで掲載している記事は、自らの著書 (*Suzuki Looks at Japan*) をもじって“A missionary looks at Japanese Christian Schools”と題されている (Vol. XII, No.4, Winter Number, January 1937)。14 頁にも及ぶ同記事は、宣教師の視点からキリスト教学校の内部の実態を率直に伝えようとした内容。この中で再三語られているのは、日本の教育体制とキリスト教学校側の対応。キリスト教学校の役割を一定程度評価しつつ、しかしその現状に何処か不満と限界を感じていることが伝わってくる。

ラマートがキリスト教学校について評価している点としては、教師と生徒、生徒同士の関係が公立学校よりも近いと卒業生が感じていること、教会につながる生徒はさほど多くはないものの、キリスト教の精神や教義を多くの人に広めることができていること。一方で、多くのエネルギーが宗教教育に費やされているのに、生徒たちのキリスト教への関心は「興味」程度でそれ以上進まないこと、試験を意識した (単にノートに授業内容を写すだけの) 教育方法にほとんどの宣教師が満足していないこと、そして結局は文部省の考えが教育上唯一の基準になってしまっていること。キリスト教学校の実態は、キリスト者たちの支援によって提供された一般普通教育に他ならず、国家教育制度の一部でしかない。文部省によって示された教育課程に従って運営していくしかないと述べている。ラマートにしてみれば、国家から枠を嵌められて自由な教育が難しいと感じていたのだろう。

クォーターリー (Vol. XI, No. 4, Autumn Number, October 1936) の Editorial Notes “What is the matter with Japanese Christian schools?”：理事や同窓生などキリスト教学校を支える人たちは、日本の教育制度に見合った形で学校を発展させることや、宣教師やミッション・ボードの考えに当てはめるのではなく日本各地で広く用いられている基準で学校を整備していくことを望んでいた。また「観察」の中には、軍は外国人という理由で宣教師を国家の敵と見ているとの記述も向けられる。宣教師やミッション・ボードの考えとキリスト教学校を支える日本人たちの思いが乖離し始めているとこれらの記者は捉えている。

「観察」筆者の宣教師は、日本国内には教育勅語に基づいて一つの宗教が形成されていると批判。学校では祝日に勅語奉読の儀式を行わなければならないが、多くのキリスト教学校ではこれを礼拝形式で行い、讃美歌や聖書朗読、祈りと共に儀式の意味が語られている。しかし、礼拝形式もいつまでも許可されるのかは疑わしい、と述べている。御真影については、1936 年夏に教育同盟の指導者 (理事長のことと思われる) が「勅語奉読式をできるかぎり感銘あるものにすると同時に、御真影の下賜を申し出るように助言した」。実際、キリスト教学校が御真

影を下賜されるようになるのは 1930 年代後半から 40 年代にかけての時期が最も多いことから<sup>5</sup>、同時期のキリスト教学校日本人指導者や、学校を支える保護者、理事たちは、文部省の意向に沿うことを重視していた様子が伺える。ただし文部省からは 1936 年 11 月に、御真影を飾るのにチャペルはふさわしくないと指摘を受けた。ある学校では、キリストの昇天を描いたステンドグラスをカーテンで隠さなければ、御真影を飾ってはいけない、との指示を受けたとも「観察」筆者の宣教師は報告している。

宣教師は上記のような日本の現状に対する疑問

何故キリスト教界や学校はこのような社会状況にもっと関心を持たないのか？何故、朝鮮や台湾のようにもっと衝突が起きないのか？日本人キリスト者はこの問題について関心を持っている。しかし彼等の関心は、本土の外にいる人々は理解しがたい特定の考えにすり替えられている。

宣教師は、日本人キリスト者たちの考えがすり替えられてしまう三つの要因を挙げている。第一：キリスト教界指導者は文民官僚を軍の圧力から守ってくれる「味方」とみなし従っているから。

第二：日本人は歴史的に神道を宗教と見なしておらず、信教の自由を侵すような話ではないと考えている。

第三：キリスト教も神道も同じ「神」という単語を彼等の god(s)を表すのに使っている点が、外部の人間にとって日本人の態度を分かりにくくさせている。

この文書を書いた宣教師は、日本人キリスト者が本心を表に出さずに隠れて話し合っている様子や、表面上は従順に国の指示に従っている態度を不思議な思いで見つめていたのだろう。

以上見てきたように、日本のキリスト教学校は政府（文部省）の指示に従順で、キリスト教を市民に広める一定の役割は果たしているものの、徐々に教育内容が「骨抜き」にされていくことを、ラマートは歯がゆい思いで見つめていた。

一方で、ラマート文書では、彼の在職していた明治学院に関するいくつかのエピソードが紹介されている。1930 年代のキリスト教学校の様子、学生と教職員指導者との事態の受け止め方に違いが見られ、とても興味深いので、紹介したい。

「明治学院では将校が高等学部学生の教練を視察中に、「国の第一の目的は何か。人民の幸福を保障することか、それとも強力な軍事力を作り上げることか」と尋ねたところ、三十人の学生が「人民の幸福」に手を挙げ、罰として行進させられた」<sup>6</sup>というエピソードは、明治学院の自由な校風を伝えるのに十分であろう。

あるいは、教育勅語の置かれている集会室で、ある教員が学生を笑わせるようなアナウンスをしたことで警戒した雰囲気広がった。院長はそのことを内密にするようにと学生を諭し、勅語はいつも以上の丁重さで他の場所に移された。管理職の者たちは、この話が漏れることで、学校当局者に対して不満を抱く学生や同窓生がストライキやデモを鼓舞することになるのではないかと心配した<sup>7</sup>。

このエピソードからは、キャンパス内には自由で和やかな雰囲気があったことが分かる。学生も教師も、明るく冗談を言い合ったり、自由にものを語ったりすることができていた。一方、指導者たちは国家政策に対してとても神経をとがらせている様子も分かる。彼等は保護者や学生から悪い評判が出ることをとても怖れており、ゆくゆくはそうした評判が学校存続問題にまで響くことを極度に警戒していたのである。

しかし、このようなりべらるな雰囲気は、1940年前後から急速になくなっていく。

1938年にラマートは母国アメリカに帰国し、海外伝道局出版部長（director of the Editorial and Publicity Division of the Board of Foreign Missions）に就任。

## 2. 戦時下の明治学院、「東亜科」の設立

1935年11月に田川が学院長を辞任した後、米国改革教会宣教師ホキエ（Willis Gilbert Hoekije）が学院長事務取扱に就任。ホキエは厳しい学院財政と政府からの要求に向き合わねばならなかった。

明治学院の場合、1905年に教育勅語は下賜されていたが、御真影を管理する安全な場所が確保できないとの理由で御真影の受け取りを拒否していた。しかし1938年10月、ホキエは、学院長が外国人であることで学院が不利にならないように、御真影を受け取ることを決意し、礼拝堂の一角を奉安殿として、御真影を受け取ることにした。昭和十三年度学事年報において「御真影奉安所ヲ建造シ、年度内十月二十六日御真影奉戴ノ光栄ニ浴ス」とあり、それに先駆けて同年5月17日に学則第一条を従来の「高等商業部及高等学部ハ基督教主義ニ基キ高等専門ノ教育ヲ施スヲ以テ目的トス」から「高等商業部及高等学部ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ基督教主義ニヨリ高等専門ノ教育ヲ施スヲ以テ目的トス」に改訂した。

明治学院が御真影を受け取ることを決めたのが、ラマートの帰国直後であったことは、単なる偶然とは考えにくい。明治学院当局は時局への対応に神経をとがらせ、ラマートの帰国を機に国家に抵抗しないことを意思表示したということであろう。

ホキエが同年10月、文部省に「御真影」を受け取りに行った際、役人は「御真影」をホキエには手渡されず、随行した加藤七郎幹事に渡した（加藤は文部省を出てからホキエに渡した）。1938年の段階で、外国人学院長を忌避するような態度を文部省側がとっていたことが印象的である<sup>8</sup>。

一方で、1936年11月の段階で既に理事会では彦根高等商業学校校長の矢野貫城を次期学院長に招聘することを決定し、1939年9月にこの決定通り矢野が学新たな院長に就任した。矢野は高等商業学校教員を務めたばかりでなく、文部省官僚の経験もある人物である。明治学院理事会は、文部省と矢野との強いつながりが学校運営上有利に働くと考えていたと想像され、実際に矢野は、戦時中の学院を存続させるための対応を取るようになった。

1940年9月での教育同盟校長会申合以降、明治学院においては海外伝道局からの資金援助については、明治学院理事会は1940年11月の時点で既に受け入れを断ることを理事会が決議し、1941年9月以降は外国人教授の授業全てを当面休止措置となった<sup>9</sup>。こうして益々、欧米

の影響力を排除して日本人を中心とした、政府の目論む世界秩序の構築に向けて協力体制を強めていった。矢野貫城は学院長就任1年目の正月に発行された『明治学院時報』に、以下のような声明文を載せている。

今年支那事変が始まってから第四年目であるが、東亜が大飛躍をなして一段と高い政治形体、文化形体及生活形体を出現する為に非常な腕きをなして居るのが、我々の目の前に展開して居る深刻にして広範囲に亘る事変の真の姿である。

(中略) 明治維新といふ我国に取って極めて重大な時期の際の建設時代に当って大切なる役割を課せられた我が学院は東亜の一大革新期である今次の事変に於ての役割を演ぜなければならぬ。(中略) 基督教主義に依て、忠君愛国を行ずることを以て道とする我が学院の健全なる発達は、たしかに世の光、地の塩たる働きを強めることである<sup>10</sup>。

この声明から、矢野は学院を維持するためには政府の政策に対して協力的でなければならないと考えていたと推測できる。他の記事では、矢野は「将来に來らんとする東洋の新秩序、大勢に順応適合して、邦家のため最もよき功獻を為しうる基督教的青年を養成せんとする理想」と述べたことが伝えられている。ここには、キリスト教教育を国家のアジア政策に適合させようとする考えが見受けられる。

『昭和十四年度学事年報』(1939年度)には「新学年度より高等学部ニ東亜科新設ノ為メ年度末木造二階建建造物ヲ改造シテ教室二個研究室一個備品室一個ヲ儲ク」と書かれている。東亜科を新たに設けた理由は、「現下東亜情勢ノ急速ナル変転ト之ニ対処シテ指導的立場ヲトル我国ノ実情ニ鑑ミ東洋ノ文化並ニ經濟事情ニ通ジ且ツ支那語ニ堪能ナル実務家ヲ養成スルコトノ急務ナルヲ認メタルニヨル」ことであった

### 3. ボーベンカークの戦時下と戦後の様子

ヘンリー・ボーベンカーク 米国長老教会宣教師 (ウェスタン神学校出身)

学生時代はYMCA、学生ボランティア運動 (Student Volunteer Movement)、国際親善

1930年来日、明治学院で1年教鞭を執り、1932年から三重県津で宣教活動

アメリカ行き日本客船に本土退去を願う人のための乗船余地があることが報じられたので、1941年12月2日、家族とクリスマスを過ごすためにヘンリー・ボーベンカークは仲間の長老教会宣教師ジョン・スミスと共に龍田丸に乗船。しかし、帰国のため太平洋上を航海している最中に、真珠湾攻撃が勃発。最初、乗客たちは事情が分からず、船が突然旋回して西に航路を取り始めたことで、船上は大騒ぎになった。ようやく、掲示板に「この船は、日本帝国政府の命令で日本へ引き返すことになった」と貼り出されたことで、事態を飲み込むことができた。乗客たちは横浜到着後、高い壁に囲まれた“Yokohama Yacht Club”へと連れて行かれ、3ヶ月間収監された。そこには、全部で32人が収容されていた。彼らは収監中カミソリなど刃物を使うことが許可されなかったため、髭は伸び放題だったと言う。

3ヶ月後の1942年2月、大阪へと移送され取り調べ。日々の取り調べでは、日本語で書いた説教について問いただされた。神による統治と天皇の神聖性について焦点化され、こうした部分の言及に有罪の可能性があるとして示唆を受けた。また、スパイの容疑もかけられていた。更に神戸に移送されたが、取り調べ調書の不備が指摘されたために起訴は取り消され、1942年夏横浜より強制送還された。

帰国後、カリフォルニア東部の日系人マンザナル収容所(Manzanar War Relocation Center)で活動。1946年再来日し、日本の教会とキリスト教学校の状況を視察、アメリカの教会に報告書を送った。帰国後1947年からはIBC(Interboard Committee for Christian Work in Japan)事務局長として日本の教会及びキリスト教学校の復興を支援した。

#### 4. ハナフォードの活動

ハワード・D・ハナフォードは米国長老教会宣教師として1915年来日し、当初は近畿で宣教活動の後、1935年から明治学院教授として活躍した。日米開戦前最後まで明治学院に残っていた宣教師であり、開戦後は8ヶ月にわたり田園調布の外国人収容所(カトリック女学校)に収監された<sup>11</sup>。13人のアメリカ人他計45人が収容されていた。

ある日、かつての教え子が収容所にハナフォードを訪ねに来たところ、監視員に厳しく詰問され面会は叶わなかったが、様子は夫人に伝えられたという。1942年に強制送還させられたが、1946年1月に再来日し、日本のキリスト教学校の復興に尽力した。

#### 5. 湯浅八郎のキリスト教国際主義

湯浅八郎(1890~1981) 同志社総長を戦前と戦後に、1950年からは国際基督教大学学長  
1908年から渡米、1916年にイリノイ大学大学院入学し1920年Ph.D取得

クリスマス休暇期間(1919年12月30日~1920年1月2日)<sup>12</sup>にアイオワ州デモインでの学生集会に参加した影響も、湯浅にとって相当大きいものだった。従来の研究等では、このデモインの集会は妻となる鶴飼清子と出会った場所として知られているが<sup>13</sup>、実は湯浅の将来を方向付ける重要な集会でもあった。ヘイズの報告書には、この集会に参加した直後に書かれた湯浅の書簡が紹介されている<sup>14</sup>。その内容は、とても重要な内容を含んでいる。

1. 現在のアメリカ人の生活において極めて重要で根本的な力となっているキリスト教。これまでの私は、アメリカ人クリスチャンたちがキリストに従おうと努力している誠実さと熱心さを鋭く感じたことはありませんでした。私はキリスト教とアメリカ人クリスチャンたちのことを真剣に受けとめ始めています。
2. 「自己中心主義」対「奉仕の人生」。世界宣教という最大級の目的へ忠誠と献身を示す気高い姿は、私の自己中心主義な生き方が実に惨めであることを気付かせてくれました。私は視点をエゴへの奉仕から神と人類への奉仕へ移しました。自分1人のために生きることは、

自らを滅ぼすようなものです。私はクリスチャンになりたいと思いました。

3. 神とキリスト。キリストが私にとって真実な存在になったので、神の存在も私にとって真実になりました。そして私は、キリストの特徴を生きて証する人々と対面したので、キリストは私に真実な存在となりました。更に明らかになったことは、偉大なクリスチャンのリーダーたちは、自らのインスピレーションの源としてイエスの十字架を背負っているということです。私はこの事実の意義を見出さなければなりません。また、神が生きている存在であることをもっと学ばなければなりません。

4. 祈り。私は、かつては祈りをしていました。しかし、過去5年間、祈りたいと願った時はあったけれども祈らなかったし、祈れませんでした。私の宗教生活が新しい夜明けを迎えると共に、私は祈り始めました。今となっては、どうしたら祈りなくしてクリスチャンとして熱心に生きられるのか分かりません。

5. 交わり。いかなる人間関係も、真の主にある交わり以上に貴重なものはない。いかなる交わりも、共通の信仰や共通の理想と目的に基づいている交わり以上に人を触発させるものはない。私はこのような交わりを日本人仲間との間に見つけました。彼らは日本を軍国主義や物質主義、あらゆる形の不正義や非人道的なことから救うため働く準備ができています。私は、特に日本人女子学生で我が国の再建という壮大な仕事を共有しようとする意志のある人と会うのが嬉しいのです。彼らは若い日本の希望です。

6. 国際主義とキリスト教。キリストの言われるとおりの神を私たちの父として受け入れ、世界の人々が我々の兄弟だと信じるなら、国際的で人種を越えたキリスト教の考えはひどく分かりやすい。それは、異なる人々の隔てを克服する本当の基盤となります。例えば日本人と中国人とか、朝鮮人と日本人などが当てはまります。私たちは兄弟であり、兄弟関係の番人です。今日我々の有する不正や邪悪なことは、我々にとって共通した敵です。結局のところ、私たちは正義と博愛のために同じ戦いを戦っている同士なのです。これが、既に自由な考えを有している人々を、東洋における自由な動きを活発にするために送り出す手段や方法を模索している理由です。敬具 湯浅八郎

デモイン集会から湯浅は益々キリスト教信仰への確信を回復し、軍国主義や物質主義を克服するために、キリスト教に基づく国際主義を広めたい、仲間と協力して、特に中国朝鮮の人々と兄弟愛を持って友好的関係を築いていきたい、という熱い思いに到達した。

1939年から再び渡米し、太平洋戦争中アメリカで過ごす。1939年5月9日付イリノイ大学YMCA 主事ウィルソン宛書簡で湯浅はアマーストなどアメリカ各地の訪問について綴った後、アメリカン・ボードの保護の元において更に12ヶ月はアメリカに滞在することになったこと、今更科学研究の分野に戻ることは難しく、キリスト教国際主義（Christian internationalism）に関する分野でなら、自分自身を役に立たせる機会がありそうと気付いたことを伝えている。

## 6. 田川大吉郎の国際大学構想

田川大吉郎は明治学院の第三代総理であり（1922年より総理代行、1925年に総理に就任

し、1935年に退任)、1927(昭和2)年から1936(昭和11)年までの約十年間は基督教教育同盟会(現・キリスト教学校教育同盟、以下、同盟会と略す)の理事長も務めた。しかも、理事長退任後も、「田川氏の功労に感謝し、理事会と何等かの形に於いて関係を継続」してもらうため、顧問に就任することが総会で満場一致の上可決されている。また、同時期は基督教連盟教育局の長も務めており、田川は、大正後期から昭和初期にかけてのキリスト教教育界の中心人物と言える。

教育同盟成立以来の懸案だったキリスト教主義大学の設立問題は、1929(昭和4)年J・R・モットの来日をきっかけに開かれた鎌倉協議会を契機に、再び教育同盟で議論されていった。鎌倉協議会の教育関係委員会の議長も田川が務め、翌年の教育同盟総会でも田川が率先して大学設立に向けての姿勢を打ち出していた。一方、中国人留学生受け入れ問題は1939(昭和14)年に教育同盟で議論が始まっている。この問題に対しても、田川は積極的に動き、日本のキリスト教主義学校の全部を開放してでも、中国人留学生を歓迎すべきだと訴えた。この中国人受け入れ問題は、一見時局に迎合した発言のようにも見える。しかし、関係がないと思われるこの二つの課題を、田川は1921(大正10)年以来温めてきた自らの「国際大学構想」によって結びつけていた。田川はモット来日時の鎌倉協議会で、自ら議長としてキリスト教主義大学について話し合っている段階で、既に国際大学構想を持ち合わせていたのである。田川は体制を表立っては批判しない。その代わりに、長年の持論を展開することで、世界の平和安定を追い求めている。

戦後、日米のキリスト者が協同して国際基督教大学(ICU)を設立したことは周知の事実である。設立計画においては、「国際的」であることが特に意識されていた。1946(昭和21)年8月に大学建設予定地を見て回った山本忠興は「日本にある諸々の国際的団体や機関の本部を集め、その中心に大学を据えて(中略)いわば、『国際村』の建設を考えていた」<sup>15</sup>ののだと言う。田川大吉郎の思想とICU設立との直接の因果関係を示す史料は管見のところないが、先駆的な動きとして田川を認識しておくことに意義を見出せるのではないか。

## 7. 成瀬仁蔵の帰一思想

成瀬仁蔵は、帰一協会が結成される直前の1912(明治45)年5月に、日本女子大学同窓会組織である桜楓会の会員修養会において次のように語っている。

私は嘗て種々の宗教を信じた。神道も、仏教も、基督教も信じた。霊智学も、倫理運動も、社会学の人道も、スペンサー、カントその他のプラグマティズム、進化論、科学的宗教、ベルグソンなどいふやうに、十年の間に種々研究したのである。(中略)私が嘗て一時キリスト教と他の信仰と矛盾するかのやうに考へたのは偏してみたのであつた。頭脳も発達し、眼界も広くなった今日に於て見れば、違った宗教は決して矛盾しては居らぬ。真相に於て一致を発見することは決してむつかしくないと思ふのである。(中略)個性が千差万別であるやうに、宗教にも各々特色がある。決して同じものではない。併し吾々が別つべからざる一つの力によつて支配されてゐると同じく、宗教に在つても根源は一つのものである。One and

many 即ち差別裏の平等である。そこに総ての信仰を一つにすることのできる要点があるのである<sup>16</sup>。

ここで成瀬は、全ての宗教や思想の根源は一つであると力説している。帰一協会を具体的に組織している段階でのこの発言は、成瀬の帰一思想の本質的な考えと言えるだろう。すなわち、もはや一つの宗教に固執していることに限界を感じ、世界宗教的発想のもとで既存宗教の超越と統一を目指しているようにも受けとめられる。

そして、渋沢栄一らと協力して1912年6月、帰一協会を設立。同年9月からはアメリカとヨーロッパを回って、帰一思想の普及に努めた。同年11月には、米国帰一協会が設立されている。

#### 参考文献

- 辻 直人「田川大吉郎の国際大学構想—基督教教育同盟会の中国人留学生受け入れ論と連合大学論の結節点—」、キリスト教史学会『キリスト教史学』第58集、2004年7月
- 辻 直人「長老教会宣教師ヘンリー・ポーベンカークの生涯—日本での戦中戦後における活動を中心に—」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第48号、2016年2月
- 辻 直人「『ラマート事件』の真相と歴史的意義—キリスト教学校に与えた影響」、キリスト教史学会『キリスト教史学』第70集、2016年7月
- 辻 直人「興亜教育とキリスト教主義学校—学科等改編に見るキリスト教主義学校の戦時政策への対応」、樽松かほる他『戦時下のキリスト教主義学校』教文館、2017年3月
- 辻 直人「成瀬仁蔵の帰一思想—その形成過程及び米国への発信—」、見城悌治編『帰一協会の挑戦と渋沢栄一』ミネルヴァ書房、2018年2月
- 辻 直人「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響—イリノイ大学留学経験を中心に—」、立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』第36号、2018年3月

---

<sup>1</sup> Willis C. Lamatt, *Nippon: The Crime and Punishment of Japan*, The John Day Company, 1944, p.1

<sup>2</sup> Lamatt, *ibid.*, p.134

<sup>3</sup> Lamatt, *ibid.*, p.148

<sup>4</sup> キリスト教学校については、たびたびジャパン・クリスチャン・クォーターリーの Editorial Notes で、無署名で語られている。“What is the matter with Japanese Christian Schools?” (Vol. XI, No. 3, Summer Number, July 1936), “What makes a school Christian?” (Vol. XIII, No. 2, Spring Number, April 1938)など、キリスト教学校の存在意義を問うた内容が多い。

<sup>5</sup> 『キリスト教学校教育同盟百年史』95～96頁

<sup>6</sup> “Some Observations Concerning the Problem of Christianity and the State in Japan with Special Reference to the Problems of Christian Education”, by a Missionary in Japan, Summer

---

of 1936

<sup>7</sup> Lamott, *ibid.*, p.137

<sup>8</sup> 同じ外国人宣教師が院長だった関西学院の場合、1936年8月に文部省専門学務局長より御真影奉戴に関して出頭命令があり、ベーツ院長と岸波常蔵庶務主事が出向いて御真影を受け取った（『関西学院百年史 通史編 I』546頁）。その際御真影はベーツが受け取ったと言われている（関西学院大学学院史編纂室での聞き取りによる）。

<sup>9</sup> 『明治学院時報』第109号、昭和16年9月30日

<sup>10</sup> 矢野貫城「紀元二千六百年を迎へて 我が学院の使命を思ふ」『明治学院時報』第91号、昭和15年1月20日

<sup>11</sup> Howard D. Hannaford, *Internee no.11, No Visitors Allowed*, The Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the USA, 1942, p.5

<sup>12</sup> 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』日本YMCA同盟出版部、30頁

<sup>13</sup> 武田清子『湯浅八郎と二十世紀』教文館、2005年、51頁

<sup>14</sup> *Report of Friendly Relations Work Among Foreign Students Y.M.C.A. University of Illinois, 1919-1920*, pp.5-6

<sup>15</sup> C・Wアイグルハート『国際基督教大学創立史』国際基督教大学、1990年、307頁

<sup>16</sup> 仁科節編（渡邊英一起稿）『成瀬先生伝』桜楓会出版部、353～354頁（伝記叢書56、大空社、1989年）。